大阪を生きる12人の物語 第9回

ホスト 髙島幸次

ゲスト 山村若静紀

〝人〟を通すことで見えてくる大阪の文化的魅力を探る対談連載『大阪を生きる12人の物語』。第九回のゲストは、日本舞踊・上方舞（山村流）の担い手で着付け教室の運営もされている山村若静紀（わかしずき）さん。ホストはお馴染み、歴史学者の髙島幸次さんです。

大阪生まれの山村流って、どんな舞？

髙島　山村若静紀さんは、上方舞・山村流の山村若佐紀師匠の一門で、皆さん「山村若」までは同じ名乗りですから、そこは省略して、静紀さんとお呼びしますね。静紀さんは舞のお師匠さんでありながら、着付けの先生でもあるんですよね。で、今日の対談場所を提供いただいた「大阪くらしの今昔館」は、大阪の都市史や暮らしに根づいた文化をひもとくミュージアムなんですけど、いろいろなイベントをしている中で、着付け体験もやっているんです。対談前に館内を回っていただきましたが、いかがでしたか？

山村　噂には聞いていたんですが、大阪人にとってはなじみ深い天神橋六丁目という場所柄、身近すぎるというか、とにかく足を運ぶ機会を逸していたんです。でも、実際に来てみて、こんなに素敵な施設が大阪の街中にあったのかとびっくりしました。特に再現されている江戸時代の大坂の町並みが素晴らしくて、こんなことならもっと早くに来ておけばよかったです。

髙島　ここは二〇〇一年にオープンしたんですが、コロナ禍の影響で入館者数は減ってしまったものの、二〇一八年には六十二万人を超えている。で、そのうちの三十万人くらいはインバウンド、つまり外国人なんです。日本各地からの観光客はもちろん、地元の人にももっと見に来ていただきたいので、どうぞ周りのみなさんにも広めてくださいね。

　さて、そろそろ対談の本分に入っていきましょう。静紀さんは山村流の舞のお師匠さんだと先ほども触れましたが、どういう特徴のある流派なんですか？

山村　江戸時代の歌舞伎の振付師・山村友五郎を流祖として、大阪のお座敷で発展した流派です。商いの町・船場の旦那衆が奥さんや「いとさん、こいさん」といわれる娘さんたちに習わせたり、船場に隣接する島之内のお茶屋さんで贔屓の芸妓さんに舞ってもらったりして広まってきた流派でもあります。

　日本舞踊というのは、実は「舞」と「踊り」を合わせてできた言葉で、二つは本来別々のものなんです。踊りは江戸の歌舞伎から舞踊部分を取り出して発展したもので、躍動的な動きが特徴です。一方、舞は上方のお座敷で発展しましたから、埃を立てないという意味でも、動きをかなり抑制しています。また舞は、歌舞伎のようなストーリー性がない分、心情を表現するのに長けていて、自分のところへ帰ってこない旦那さんに嫉妬しつつも待ち焦がれる芸妓さんの心の内なんかを表現するのが得意なんです（笑）。

髙島　日本舞踊が舞と踊りから成り立っていることを知る人は、案外少ないかもわかりませんね。大阪で始まった山村流のほかに、舞にはどんな流派があるんですか？

山村　祇園で発展した京舞の井上流、歌舞伎俳優の片岡愛之助さんが家元の楳茂都（うめもと）流、ピーター（池畑慎之介）さんのお父様で人間国宝の吉村雄輝先生が家元でいらっしゃった吉村流などがあり、この三つの流派に山村流を加えた四派を上方四流と言ったりもします。

髙島　花柳流というのは僕でも知っているくらい有名